

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
日本画	教授	岡田 眞治	長久手市長、教育委員会、校長会まで長久手合戦図の見学対応が忙しかったが、皆様に知っていただき盛り上がりすぎてよかったです。
日本画	教授	井手 康人	公募展（院展）の審査、研究会の開催など充実した一年となった。科研費も積極的に、県大の藤原先生に参加いただき推進している。
日本画	教授	清水 由朗	自己点検項目の実践においては、80%達成できたが、一部研究活動において、他者との連携にやや不備があった。この点の解決に向けて更なる努力を続けるものとする。
日本画	准教授	吉村 佳洋	日本画の制作研究においては個展や公募展への発表を通し、自身の研究内容を客観的に考察する事が出来た。今回の反省点を今後の制作にも活かせるよう研究を重ねたいと考える。
日本画	准教授	岩永 てるみ	研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献共に当初立てた自己の計画を概ね達成出来たと考える。
日本画	准教授	阪野 智啓	今年度を始点とした科研が多くあり分担・協力研究においても課題が多く、おおむね予定通り研究は進んでいるが追及しきれていない分野もある。また制作においては特に大作においてテーマ設定を見直す時期にあると感じている。教育については今年度から学部担当学年が変わり、指導について更なる更新を模索したい。
油画	教授	阿野 義久	芸術教育・学生支援センター長として大学運営にかかわるとともに自身の研究発表で創作研究の成果を示すことが出来た事、また、各教育機関と連携した展覧会に研究室を中心に参加する等、対外的活動に評価できる1年であったと思います。
油画	教授	倉地 久	研究・教育・運営・社会貢献に対して、バランスよく自身が努力し本務を遂行できたと考えている。特に、副学長・教研審メンバーとして、大学運営と業務に昨年より努力できたと考えている。
油画	教授	額田 宣彦	研究活動～目標を達成、研究を深めることができた。学生研究アトリエが狭く拡張の必要性を感じた。・教育活動～ゼミ、作品講評会、討論会、レクチャー等を全学年に渡り実施。学生の自主性、思考力、実践力を育めた。・大学運営～当初計画より業務が大幅に増加しストレスを感じた。特に長寿命計画工事では美術学部建物全体を中心に担当することになり時間を取られ研究活動に支障があった。次年度は研究とのバランスを可能であれば配慮したい。・社会貢献～「GROUND」会合、「GROUND3」企画、シンポジウムに参加
油画	教授	井出 創太郎	2008年より継続する腐蝕銅版画を基軸としたプロジェクトである落石計画は、2年間実施を見合わせていたが、本年度は「落石計画2022」として、現地へ赴き、2023年に実施を予定する第13期落石計画へとつながる研究活動をおこなうことができた。また、落石計画と同様に研究活動であり教育活動としても位置付ける『光射す器/種蔵の影』（飛騨市種蔵集落）展を昨年度に続き実施することができた。両プロジェクトは井出研究室の主軸となる事業であり授業である。本年度は、体調不良により事前準備の面で、学生に負担をかけることとなった。次年度へ向けて計画的に準備を進めて行く必要があると痛感している。
油画	准教授	高橋 信行	展覧会に向けた制作は充実したものとなった。美術特別研究の授業内容を大きく変え、コミュニケーションの充実を図った。
油画	准教授	増田 直人	計画した研究活動は実行 満足出来る。仮の研究室の使用が難しく、改善を希望していきたい。教育活動、大学運営へ参加出来るように改善を希望していきたい。社会貢献、新国立美術館のコロナ対策の為、一般審査に参加出来なかった。しかし愛知県立美術館やギャラリーで一般出品者に個別に作品へのアドバイスを行なえた事で社会貢献出来たと考えている。東海テレビ愛の鈴チャリティを長期継続している事でチャリティーへの理解を深めている事は満足できる。ウクライナへの支援を考え、戦争反対のドローイングを展示する企画を実現出来なかった事は次年度に継続して検討していきたい

油画	准教授	白河 宗利	創作研究においては、個展開催、「AFAF アートフェアアジア福岡」等に出品し、専門である絵画の技法材料研究の新たな知見や成果が上がった。その一方で、美術館から依頼を受けた受託研究や外部から依頼された業務、大学運営の比重が大きくなりすぎている感があり、来年度からは創作研究とのバランスを取りながら進めていく必要がある。
油画	准教授	岩間 賢	研究活動①「東京ヒューナレ」研究活動②「いちばらアート×ミックス」研究活動③本学と名工大との連携事業「ARTFUL CAMPUS」では、プロジェクトディレクターとして関与した。研究活動④「月出工舎   みんなでつくるがっこう」研究活動⑤「取手アートプロジェクト   半農半芸」では、これまでの成果が認められ文化庁や自治総合などから複数の事業採択を受けた。研究活動⑥⑦はCOVID-19の中での新しい教育研究の様式をつくりあげ継続実施している。各研究活動においては、HPを開設し成果発表にも取り組んだ。大学運営では、教務委員として従事し、名古屋工業大学との連携事業にも注力した。社会貢献では、文部科学省中国政府奨学金審査委員に加え、岐阜県白川町、千葉県市原市、茨城県取手市のAIR審査員をした。また、メキシコ政府日本大使館と国際交流展についての企画検討もはじまっている。他、茨城県取手市とは、小規模特認校の教育モデルづくりなどにも取り組んでいる。
油画	准教授	大崎 宣之	研究として、美術館を中心に個展/グループ展での作品発表（7件）やパブリックコレクション、書籍への作品提供等これまでの活動が評価につながる年度となる。大学運営として各種委員会、アーティストインレジデンス企画（1件）、芸術講座の企画（1件）、社会貢献活動としての名古屋市文化振興事業団運営委員、展覧会企画や講演（4件）など充実した活動をおこなった。
油画	准教授	猪狩 雅則	入試委員では受験者のストレスのない受験をイメージし、適宜発言をおこない運営参加できてきたと感じている。専攻運営に関しては、専攻会議などで発言を積極的に行い授業や専攻運営に関われたように思う。学生の指導は、相変わらず難しさを感じているが、学生の特性を見極めながら、対応できてきたように思う。
油画	准教授	安藤 正子	研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献の全てに於いて、全力で取り組みました。来年度以降も引き続き積極的に取り組みたいと思います。
油画	准教授	平川 祐樹	総じて、大きく飛躍の年となった。引き続き研究制作・教育活動共に勢力的に行っていきたい。
油画	准教授	横山 奈美	研究成果を発表する機会が多く慌ただしい一年だった。時間に追われるからこそ的確な思考が必要になるため、研究では多くの気づきを得た。教育、大学運営に関しては、先生や学務課の方々に助言を頂きながら無事に一年を終えることができた。来年度も、柔軟な姿勢で様々な研究活動や運営に携わっていきたい。
彫刻	教授	神田 每実	年度当初において、研究活動・教育活動・社会貢献の各活動に対して掲げた目標については、学生、学外関係者、及び組織から良好な評価を頂くことができたことを根拠に、概ねの達成をみたのではないかと考えるが、大学運営に関する活動については、際立った活動、取り組みとはならなかったことについては、今後に向けた引継ぎをどのように行うかという点も含めて、退職年度となる次年度に向けての反省点である。
彫刻	教授	中谷 聡	第85回新制作展（国立新美術館）をはじめ、第9回花とみどり・いのちと心展（国営昭和記念公園）に出品すると共に、第3回枕崎国際芸術賞展や川越市市制100周年記念モニュメント模型入選など、研鑽を深めることができた。変革期を迎える大学運営においても、専攻長として積極的に情報収集に努め、それらを情報発信すると共に、大学運営業務の遂行と学生の修学環境の保全、教育活動の充実を図ることができた。
彫刻	教授	高橋 伸行	国際芸術祭に参加し、学生とともに現場に入ること実践的な体験に結びつけることができた。また、長期的に取り組む医療・福祉に関わるプロジェクトの一端である彫刻表現の研究に取り組み、研究報告書をまとめることができた。それらの成果を今後の授業に積極的に活用したい。現在建設工事が行われている、彫刻専攻新棟での新しいカリキュラムの構想や設備計画に携わることができた。次年度に向けて周到な準備を進めた。
彫刻	准教授	竹内 孝和	国際交流ドローイング展を本学のサテライトギャラリーとベルリン芸術大学のクエアギャラリーで開催した。本学の学生作品を展示したドイツではコロナ禍での制限が緩和されていることから盛大にオープニングが行われ、日本国大使館の大使と文化担当の外交官も出席いただけた。研究活動は今後も様々な試作や素材研究を行い、チャレンジ精神に富んだ作品制作を行いたいと考えている。教育活動や大学運営も良好な成果が得られたと感じている。

彫刻	准教授	森北 伸	令和4年度の初旬に定めた目標を概ね達成出来ました。
彫刻	准教授	村尾 里奈	今年度はコロナ禍にあっても国際交流の芽を絶やさないようにと、海外のアーティストの作品制作を遠隔指示によって学生たちが行う「リモート・アーティストインレジデンス（AIR）・プロジェクト」を実施しました。また協定校となった韓国のソウル市立大学環境彫刻学科の李ユンソク教授を招聘し、交流展を開催しました。学生たちは展覧会設営に関わり、彫刻による展示空間の作り方や、海外輸送のための梱包や運搬、木箱製作などを実践的に学びました。「惑星の姿見の中に」展では若い世代の国際交流だけでなく専攻を超えた交流をも促すことができました。
芸術学	教授	小西 信之	昨年に続き病気療養中の教員がいつ戻れるかわからない状況が続く中、非常勤の先生を特別に複数依頼し、なんとか学生への指導を今年もカバーできたと思う。2名とも希望する大学院に進学できたのは良かったと思う。旧デザイン棟という新しい校舎に移った1年目、以前よりもより良い環境で教育・研究ができていのではないかと。相変わらず3人の教員での専攻運営なので、労務管理、仕事分担の不均衡がないように気を付けている。昨年よりは自分の研究に時間がさけたかと思う。とりあえず無事大きな問題もなく専攻を運営できたのは良かったと思う。
芸術学	准教授	本田 光子	研究は外部資金を複数得て基礎的な調査に従事し、その成果を特講の講義で教育へと還元することで手応えを得た。ゼミ生に加えてイタリアの大学院から留学生を受け入れ、丁寧な個別指導を行っている。また豊橋市文化財保護審議会委員を新たに拝命し、美術工芸品の調査に従事して地域社会への貢献に努めた。休職中教員のサポートを、教育の質保持および学内業務の面で担った。
芸術学	准教授	金子 智太郎	専攻内の業務や多くの委員会に携わり、教育・研究環境の改善に尽力した。また、2回の芸術講座などを通じて、学外との交流も図ることができた。反省すべき点はあるが、おおむね目標を達成できた。
デザイン	教授	水津 功	研究活動では、「共進化のデザイン」の研究成果を応用したプロジェクト「地域の一部となれ」が日本財団みらいの福祉施設建築プロジェクト2021（2022.3発表）に採択された。「公共事業におけるデザイン意思決定」では、尾張旭市の受託事業「三郷駅前まち育てプロジェクト2期目」において市民参加WS、社会実験、オンラインフォーラムを実施した。教育活動ではデザイン専攻実技カリキュラムを大きく更新するとともにパブソン大学の山川先生を招聘し芸術大学のためのアントレプレナーシップ教育を実施した。また「自己理解プロセスを含むデザイン学習プログラム」を本学のデザイン教育、慶應義塾大学理工学部、名古屋大学工学部の授業において実施した。大学運営においては、全学施設整備委員長としてキャンパスマスタープラン2021を策定した。名大を中心とするスタートアップエコシステムの協力校としてプラットフォームの事業を推進した。社会貢献としては尾張旭市の受託事業の他、様々な自治体等の委員会における会長職を勤めた。
デザイン	教授	柴崎 幸次	概ね良好に実施できた。
デザイン	教授	今尾 泰三	在任最後となる本年度は制作、研究などに充実した年度となったと考える。特に12月に芸術資料館全室を使って行った退任展では本学内外の鑑賞者から、多くの評価を受けることが出来た。自身がこれまでにに行った展覧会の中でも重要な展覧会となった。本学退任にあたって、充実した年度となったと考える。
デザイン	教授	佐藤 直樹	令和4年度は特に「社会貢献」の分野で年度当初の計画を上回る成果（各種審査の依頼、デザイン業務の依頼等）を上げることができたように感じている。それはとりも直さず、本学の存在や研究成果が社会から期待されていることの証左ではないだろうか。そうした要請に誠実に応えることで本学の価値を高めていきたい。
デザイン	教授	本田 敬	3年目となった社会連携授業（学部2年、3年）では、より実践的な形で教育活動が行え、なおかつ地域や企業に対して、大学ならではの提案や関わりの連携が図れた点は今年度大きな成果となった。個人の研究テーマであるインクルーシブデザインの分野も掛け合わせ、今後複合的な視点を持ったプロジェクトに成長させたい。
デザイン	准教授	夏目 知道	2022年度コロナ禍の影響を受けながらも様々な活動を行うことができた
デザイン	准教授	春田 登紀雄	本年度より、デザイン専攻は、新たな教育ビジョンを掲げ創造性を拡張する実現可能なデザインプログラムを始動しています。アントレプレナーシップ教育もその一環であり、様々な学習の成果を公開することで社会からフィードバックをいただき、教育のさらなる発展を目指していきます。

デザイン	講師	望月 未来	令和4年度は社会貢献の活動を数多く展開できた1年でした。来年度以降も教育活動・大学運営とのバランスを意識しつつ継続していきたいと存じます。
陶磁	教授	梅本 孝征	年度を通して研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献において、成果を得ることが出来た。特に秀でた成果として陶磁専攻「芸術表現コース」の課題として古川美術館との産学連携事業が挙げられる。
陶磁	教授	長井 千春	今年度は美術学部長として大学運営全般に尽力した。また、博士後期課程学生3名を指導し、論文研究と発表の指導を多角的に行った。
陶磁	教授	崔 宰熏	研究活動・教育活動・大学運営・社会貢献全てにおいて積極的に取り組んだ一年でした。特に制作研究と発表では、型鑄込み整形では難易度の高い造形に取組み作品「MUSUBI」を完成させ「MASATOSHI SAKAEGI THE CROSS展」などに発表することができました。教育活動においては去年から導入した「デザインシンキング」授業にその分野のプロによる講演を実現させ授業の内容と質をより高めたことや蔦屋書店カンパニー社長の特別講演会をデザイン専攻と企画しリンディングカンパニーのビジョンと取組みを学び学生たちの自己啓発につなげたことは価値あることでした。また陶磁専攻のインスタグラムを開設しこれらの情報を積極的に発信することで社内外の関心を寄せることができました。ことを踏まえて更にステップアップしていくよう努力していきたいと思ひます。
陶磁	准教授	田上 知之介	予定していた研究活動を実現させることができました。今後は、主体的な研究活動により注力していきます。また、教育活動においては授業内容の改善を試みました。入念な授業計画に基づいた丁寧な指導を行い、教育成果が出始めています。
陶磁	准教授	佐藤 文子	令和4年度の計画に沿って各事項ともに積極的な取り組みを行うことができました。特に研究活動においては、二国間交流事業として現地へ渡航し研究を進めることができました。研究制作活動としては、素材への可能性を模索することができ、陶芸教育の取り組みと陶磁器における色彩や原料素材についての研究を行うことができました。次年度においても引き続き、陶磁原料や釉薬分析による多岐にわたる陶芸表現の可能性を探求していきたい。
陶磁	准教授	小枝 真人	令和4年度の計画に沿って各事項ともに積極的な取り組みを行うことができました。とくに研究活動においては数多くの展覧会での発表が出来、積極的に取り組み概ね良好な成果を得た。次年度は教育活動において、より専門的な教育出来る様、他大学の陶磁教育機関などと連携協力して陶芸教育の可能性を模索していきたい。また、ワークショップの開催など社会に向けた研究活動から新たな学びを積極的に取り入れたい。
メディア映像	教授	石井 晴雄	長久手市との連携を通して授業内で様々な実践的なプロジェクトを行い、社会との連携を通して社会貢献をするとともに、学生もより実践的な制作を行い、スキルアップと視野の拡大、対話力の向上が達成できたと思う。
メディア映像	准教授	森 真弓	今年度は、昨年度に引き続き、社会及び地域連携を含めた社会貢献活動と、実際の教育プログラムへの反映を行った。また、来年度に発足する新専攻の準備に関わる各種活動（特に入試体制の確立、広報など）に尽力した。
メディア映像	准教授	有持 旭	総じて実りある1年であった。まず研究活動と社会貢献に関しては、国内外で多く活動できた。例えば、サウジアラビアとポーランドとの作品制作、エストニアとクロアチアでの科研費研究活動である。アニメーション制作と論文はそれぞれ時間のかかる研究だが、各1つつつ完成させられたことは、今後の更なるモチベーションに繋がると感じているし、学生に作家及び研究者としての姿を見せられたと思う。教育活動と大学運営に関しては、他教員や事務職員のサポートもあり、滞り無く遂行できた。
メディア映像	准教授	池田 泰教	本年度は海外発表を含む3つの作品発表と2つの研究プロジェクトを平行して取り組むこととなった。総じて来年度以降の新たな挑戦へと繋げることができたと捉えている。教育活動においては開設初年度ということもあり、環境の整備と並行して授業内容を整えることに注力した。機材納期などの事情から当初の内容を変更せざるを得ない状況もあったが、思い切った変更は授業内容を再考するきっかけとなり、結果的により良くなった部分も多い。また、学生たちの積極的な取り組みに触発されることも多くあり、次年度以降の授業内容へ活かしたいと考えている。大学運営については専攻内の環境整備を中心に、各種委員会に積極的に参加した。また、学会活動では支部活動の充実に努め、本学での支部研究会開催を実現した。

教養	教授	清道 正嗣	研究系はコロナの影響もあり低調であったが、教育については予定通りであり、事務系に予定以上の労力を割いたので、十分な活動をしたと言える。
教養	教授	石垣 享	授業運営および研究に関しては、新型コロナウイルス対策にも慣れたことで、2019年レベルに戻すことができた。しかし、人事委員会では私が委員長でなくなったことより、会議時間が私の授業時間に設定され、欠席することが多く、年度後半では、家族の問題で年休を取らざるを得ず、会議の欠席があった。研究活動の復活は、次年度以降の活動が活発になる可能性があることから、昨年よりも良い年度であった。
教養	准教授	数森 寛子	教育活動においては、授業の履修者一人ひとりの学習進度と関心を常に把握するよう心がけ、それぞれの目標達成に向けて指導を行った。研究活動については、国際シンポジウム「ロマン主義と第二帝政期の文学」に参加し、研究発表を行った。